

奈良女大家政

○戸田卯子

樋泉 徹子

中川 早苗

【目的】 前報では衣服を購入し、着装する際、それぞれに適用される選択基準の重視度を世代別に明らかにするとともに、因子分析によりその構造を検討した。本報では、購入された衣服の着用の有無は衣服に対する評価〈満足・不満足〉に関連すると考え、衣服購入時・着装時における選択基準の重視度と購入後の評価および着用の有無とのかかわりを考察した。また、前報の因子分析の結果得られた因子得点をもとに人々の類型化を行い、得られたタイプ別に服装に対する意識、消費意識との関連を検討した。

【方法】 調査対象者、調査方法は前報と同様である。主な質問項目は前報に加えて購入後満足した衣服、およびその後着用していない衣服（外出着・普段着別）・購入後不満を感じた衣服、およびその後着用している衣服（外出着・普段着別）などである。分析方法は単純集計、クロス集計およびクラスター分析を用いた。

【結果】 購入後満足した衣服として、まず自分の好きな色・柄、デザインの服であるなど外観性に関する項目が、次いでサイズが自分の体に合う服であるなど実用性に関する項目の割合が高かった。着用別にみると外出着においては主に外観性が、普段着においては主に実用性が満足要因となる傾向がうかがえる。購入後不満を感じた衣服として、外出着においては実用性・外観性に関する項目、普段着においては実用性に関する項目の割合が高かった。また因子得点をもとにクラスター分析をして得られたタイプ別に服装に対する意識、消費意識とのクロス集計を行い、それぞれの差異を明らかにした。